

岡先生と『オイディプス王』

小川 正 廣

今年の3月4日の午後に岡道男先生の訃報に接したとき、私は何ともいえぬ無念の想いに襲われた。なぜこんなに早く……と驚愕するとともに、しかしむしろ驚きを覚える自分が腑甲斐なく、自分自身に向かって「ああ、しまった」と幾度も繰り返し叫んだ。

私が最後に先生にお目にかかったのは、昨年5月21～23日の東大での日本西洋古典学会の大会の折だった。初日の夕刻、山上会館での懇親会で窓側の椅子に座って少しお話した。「『オイディプス王』の解釈をめぐって」という草稿を前年から拝見していたので、オイディプスのことを話した。普段の穏やかな口調とは少し変わって、先生の語気がいささか強く感じられた。こんな場では話題にしなければよかったかなとも思ったが、それがきっかけで会のあともよま話をしてしながら、大学の門の近くまでお供した。先生の服は明るいベージュのスーツだったと思う。その後翌日の昼に控え室でギリシア旅行などの話をし、翌々日の総会では先生は学生会員のことについて幾分長い演説をされ、私は会場でそれを拝聴した。しかし今振り返ってみて、最後のお別れとして心の中に刻まれているのは、初日の夜に東大の門付近でお見送りしたあのときの先生の後ろ姿である。

岡先生が最後の数年間に打ち込まれたお仕事のひとつが、ソポクレスの悲劇『オイディプス王』の解釈の問題であったことは、多くの方がご存じである。いまさら私のごときがここで述べるまでもなく、岡先生ご自身が、ご逝去直後に公表された今では絶筆の論文「『オイディプス王』再考」（『西洋古典学研究』48、2000年3月）の中で、これまでの論点を丁寧に整理され、自説の趣旨を改めて明確に提示しておられる。主人公が恐ろしい神託を回避しようとして、そのためかえって神託を成就してしまうという成り行きが、この悲劇作品の根幹をなしている——このことを、種々の批判に答えながら、いっそうの確信を込めて主張されたのである。すでに岡先生の提起されたこの解釈は、日本の古典学会には珍しく学術上の「論争」を巻き起こしていた。幾つかの強い批判の声が上がり、先生がそれらの意見に真摯に耳を傾けられたことは言うま

でもない。だが、それと同時に岡先生は、古典文学に精通した友人・知人・弟子たちから、客観的立場の意見をできるだけ多く聞きたいと望まれた。最後の論文「『オイディプス王』再考」にいたるまでのここ数年間、先生はおそらく何人もの方々に、この研究上の問題について何らかの形で意見を求められたはずである。

例えば岡先生は、ご自分の論文の趣旨について私にまで感想を尋ねてくださった。今私の手元には、1998年6月から1999年9月までに先生から届いた『オイディプス王』の問題をめぐる草稿（未発表）・原稿のコピーや長短さまざまな私信が10点ほど残っている。そうした草稿・原稿については、同じものが複数の方々に届けられたはずであり、またその他の私信も草稿・原稿と関係がある研究上の内容である。私はすでに追悼の一文を記す別の機会を与えられた（『以文』第43号、京大以文会発行、2000年10月）。だからこの文集では、研究者としての岡先生の最後の軌跡について、自分が知るかぎりのことを幾らかでも記録に留めて、再び弔意を表したいと思う。もちろん、私自身が、何よりも恩師の最後の姿を終生忘れたくないからである。以下に、岡先生の『オイディプス王』研究の足跡を、ご病気の経過とともに記す。

- 1990年6月 ソポクレス『オイディプス王』訳・解説（岩波書店「ギリシア悲劇全集」3）（この解説で、作品解釈の新しい説が述べられる）
- 1995年4月 論文1「オイディプスと真実——ソポクレス『オイディプス王』の劇構造を中心に」（岩波書店『ギリシア悲劇とラテン文学』所収）（上記の作品解説への批判に答えつつ、改めて作品の構造的特徴を本格的に論じる。計117頁）
- 1996年3月 大阪医大付属病院で大腸癌手術
- 1998年6月 草稿1「『オイディプス王』再考——個人的体験と文献学——」（ライオス殺害の現場「三叉路」の場所を示す語enとprosの違いを詳論したあと、先生ご自身の病気の「告知」とテイレシアスの「予言」との類似性を指摘して、オイディプスがただひたすら真実を追求しているのではないことを論じる。さらに、ご自身の病気の体験にもとづき、作者は神託から逃げようとする主人公を、「現在の私たちにも理解できる

ような人間として描き出している」と述べる。ワープロA4版、13頁)

- 1998年9月 草稿2「『オイディプース王』の解釈をめぐって——丹下和彦氏の書評を手がかりとして」(論文1について『西洋古典論集』15に掲載された書評に対して、10の論点に分けて詳細に反論し、「真実追求者」説とは別の意味でオイディプスが真実を求めていると指摘。ワープロA4版、12頁。なお、この草稿の上書きにはワープロで、(1)書評を機会に論文1の趣旨を明らかにするために書いたこと、(2)論文1の執筆の際意見を寄せられた方々と書評者にこのコピーを送ったこと、(3)公平な第三者の立場から気づいた点を知らせてほしいこと、が記されている)
- 1998年9月 京大付属病院で肺癌手術
- 1999年3月 肺癌の再発。その後大阪医大付属病院に通院・治療
- 1999年7月 原稿(論文3)「『オイディプース王』再考」(草稿1および2を生かしながら、論文1公表以後の批判に正式に答える。ワープロA4版、10頁。翌2000年3月刊行の日本西洋古典学会編『西洋古典学研究』48に掲載された論文3の最終稿だが、しかし実際に掲載された論文にはかなり多くの異同がある。最終稿ではなく、校正の段階で追加された重要な部分は以下のとおり。

- (1)『西洋古典学研究』48(以下「学会誌」)5頁23-25行：
(忘れることができると言うのであれば、それは「われわれに似た人間」(アリストテレス『詩学』1453a5,16)を全く無視した解釈である)
- (2)学会誌5頁30行：すなわち救いを得るため
- (3)学会誌6頁19-20行：藤澤自身「(Oι.)は」「真実を求める」ほか、手だてはない」(p.9)と言うごとく、このことを認めている。
- (4)学会誌6頁28行～7頁1行：彼は自分の置かれた状況を判断できないほど盲目ではない。従って真実追求は彼自身の判

断と意思決定（「もし救われるとすればこうするほかない」）に基づいて行われるとみなされる。836f.（「唯一の望み」）および1080 ff.（「Tycheの子」，岡 p.50 f.）から見て，彼ができれば救われたいと願って行動していることは疑いない（これはきわめて人間的なことである）。これを私は「神託・予言の成就を避ける行動」と言うのである。

[注：原稿では、上の部分がなく、代わりに、「そしてまさに逃れるための行動が破滅へ導く。」となっている]

(5) 学会誌8頁12-14行：彼が犯人探索に着手するのは真実追求を誓ったからだけではない。「放置」すればく自分も La. 同様いつか「王位篡奪者」の陰謀の対象となる恐れがある、> だから犯人を探索するのだ、<とはっきり言う。>

[注：原稿では、上の部分の代わりに、「すなわちすでにこの段階で、」という表現に続いてく >内の言葉のみ記されている]

(6) 学会誌15頁1-9行：しかし神託・予言の成就を避けることは観点を換えれば運命（の成り行き）を阻むこと，または運命にあらがうことであろう。まさに運命にあらがうことが運命を招き寄せるのである（すなわち結果として運命に（望まずに，cf.1213，岡 p.86）「協力」することになる）。「どうしてわが素性の探索を放棄しようか」（1084 f.），「だがやはり聞かねばならぬ」（1170）と彼が言うとき，そこに現れるのは人間のありのままの姿そのもの——「もし救われるとすればこうするほかない」として運命にあらがう姿——にほかない。無実の証明であれ神託の回避であれ，救いを得るためには「（O.i.は）「真実を求める」ほか，手だてはない」（藤澤 p.9）のである。

(7) 学会誌15頁14行：すなわち「運命にあらがう者」

以上の追加・修正の作業は、最後の校正刷が返送されたあとも、岩波書店編集部との電話の連絡によって、他界される2～3週間前（2000年2月）まで大阪医大付属病院の病床で続け

られた。なお、最終稿のコピーの上書きにはワープロで、
「梅雨明け前の蒸暑い天候ですが御清祥のことと拝察いたします。この度、「『オイディプス王』再考」の最終稿を作成いたしました。来春の『西洋古典学研究』48号に掲載の予定です。御意見を頂くことができれば誠に幸いです。御意見は校正（今年12月頃）の際に有難く参考にさせていただきます。先はお願いまで。実り多き夏をお祈りいたします。 匆々

1999年7月」

とあり、さらにその下に直筆で、自説を批判的に取り上げた二人の方は「結局は小生と同じことを言っています。相違点と言えは、二人ともオイディプスは（望めば）いつでも真実追求を停止・放置できると考えるのに対して、小生はオイディプス是否応なしに真実を追求せざるを得ない状況に置かれていると考える点だけです。テキストを何度読んでも、オイディプスが真実追求を停止・放置できる状況にあるとはとうてい思えません。……」等と記されている）

1999年8月 論文2「『オイディプス王』716(en), 730(pros)に関する一考察」（『西洋古典論集』16, pp.1-8）（ライオス殺害の現場「三叉路」の場所を示す語 en と pros の意味の相違を再び詳細に検討する）

1999年12月 骨髓への癌の転移のため、大阪医大付属病院に入院（姫路獨協大学には11月20日頃まで通勤）

2000年3月 3日 大阪医大付属病院で逝去

2000年3月 10日 論文3「『オイディプス王』再考」（『西洋古典学研究』48, pp.1-18）

以上の年譜風の簡略な覚え書きからも分かるように、とりわけ1998年以降の先生のオイディプス論の深化と進展は、ご自身の病魔との闘いと並行していた。私は、ご研究について詳しく教えていただき、またご病気のこともおおよそは存じながら、この二つの関係についてははっきりとは気づかず、まったく迂闊な教え子だったと悔やまれてならない。最初の手術以来ずっと、癌の転移の不安は先生の頭の中から消えなかったと奥様からうかがったのは、先生が不帰

の客となられたあとのことだった。

私は、先生が次々と精力的に草稿を送ってくださることを単純にも喜び、ご自分の病気の体験に触れた草稿1でも、幾分余裕をもって語られているような印象を受けて安心していた。しかし今にして思えば、先生は、最後まであのよう
に旺盛に学問の「真実を追求する」ことによって、恐るべき病魔の力に精一杯「あらがおう」とされたのではなかったか。そして周囲の人々には、病気の
ことではあまり心配させないようにと気遣って、むしろ自分からどんどん研究
についてのメッセージを送られたのかもしれない。「真実」を知らなかったの
は、皮肉にも、真実を知るはずのオイディプス劇の観客のように見ていた私
(たち) だったのである。

岡先生は、ご容態の急変を多くの人に知らせずに世を去られた。

病院では気も心もはっきりしておられたので、親しい多くの方々との別れ
が、かえってとてもつらいと思われたから、と奥様からおうかがいした。そし
てご最期は、病の苦痛から解放されて、安らかな眠りにつかれた、と。

こうして私は、ずっとあとから心の中で先生のご最期を思い、その後ろ姿を
お見送りすることになった。けれど、やはり、かなたに旅立たれる前に、あの
成果を伝えたかった、この出来事も知らせたかった。せめてあと一言でもお話
して、教えを乞いたかった……。このように、今ではもう遅すぎる、はかな
い願いのみが次々とわいてくる。目の前に、何かはっきりと大きな空白が生じ
たようで、悲しみと痛恨の念は日々増すばかりである。

(ご病状の詳しい経過について、奥様に教えていただきました。

謹んでお悔やみとお礼を申し上げます。 2000年9月記)